

【やや黄色い熱をおびた旅人】

10

メラーキャンプ

1997年7月  
ターソーンヤーン  
(タイ)

原田宗典

メラークャンプへ行く前の日、私はメソッドという町の二階建てのホテルにいた。夜半、ものすごい雨が降ってきた。弾丸のような雨だった。私は部屋のエアコンが壊れているから、何とかしてくれと、ホテルのフロント係にかけあっている最中だった。

「マイルーム、エアコンディショナー、ダウン……」

「イエス、イエス、ダウン！」

「アイ、ウオント、エアコンディショナー」

「オオ、ミートゥー」

お互い怪しい英語なので、どうも意思の疎通が上手くいかない。何だかんだと押し問答をしているところへ、いきなり雨音が変わったのだ。

私はエリトリアを去り際に遭遇した、あの豪雨を思い出した。いや、あれ以上の激しさかもしれない。

「ゴー、バック、ユアルーム」

フロント係は真剣な目つきで言った。そしてすぐに奥へひっこんでしまった。従業員たちに知らせにいったらしい。水が来るのだろうか？

カンボジアで聞いた、一晩で六メートルも嵩を増す水が？

私は二階の部屋に戻り、少しでも風通しをよくするために、ドアを半分くらい開けておいた。雨はますます激しさを増していて、窓を開けることはできない。エアコンは相変わらず熱風を吹き出すばかりで、まったく役に立たない。私は三十分おきにバスルームへ行つて、シャワーを浴びた。そして雨臭いバスタオルで身体を拭いた。

明け方、ようやく雨音が鳴りをひそめてきた。そして私は浅い眠りについた。

翌朝、一階のレストランで顔を合わせたスタッフたちは、皆一様に眠られぬ夜を過ごしたらしく、似たような顔つきで朝食の席についた。

「いやあ、やばかったね、昨日の夜」

最初に口を開いたのは、現地コーディネーターのR氏だった。

「やばいって、洪水ですか？」

ディレクターのK君がすぐに反応する。

「うん……あれ、あと一時間くらい降ったら、ここ、膝くらいまで水来てるよ」

「まじですか」

「まじまじ。見てごらんよ」

R氏はレストランの壁紙を指差した。きれいに掃除してあるが、よく見ると確かに、膝のあたりの高さには水の来た跡——薄汚れた横長の線が見て取れた。

十五人も入れれば一杯の、小さなレストランだった。給仕は昨夜のフロント係だった——ひよつとしたら、厨房のコックも皿洗いも彼が一人でやっているのかもしれない。

私たちはアメリカン・ブレックファストを注文したが、R氏の助言で生野菜は控えることにした。

「やっぱあれですか、腹下しますか？」

率直に尋ねると、R氏はうーんと困ったような顔をして、小さい声で言った。

「寄生虫とか伝染病とかね、怖いからこの辺は」

私たちは一同しんとして、ごくりと唾を飲み込んだ。「寄生虫とか伝染病」などという都会にいれば非現実的な言葉が、今、目の前で口にされている。その奇妙な感じ。いずれにしても私たちは、誰も生野菜は食べなかった。

食後、私たちは不味いコーヒーを飲みながら、メラークャンプとカレー族についての少ない情報を交換しあった。といっても事情通のR氏の話聞いて、私らが質問するという形ではあったが。

「メラークャンプまではここからどれくらい？」

「そうねえ、一時間半、雨だから三時間かも」

「そんなに違うんですか」

「君、昨日の雨、体験したでしょう？ あんなのが降ってきたら、進めると思う？」

「ですよねえ……向こう、大丈夫ですかね？」

「さあ……洪水で二、三軒家が流されるくらいのはあつたらうけど……まあ、毎年のことだからなあ」

メラーキャンプというのは、ビルマの少数民族カレン族の難民キャンプである。その数、約二十万人——うち一万五千人がタイ北端の国境沿いにあるメラーキャンプに暮らしているという。

「カレン族は独立を求めてミャンマーがビルマだった頃から戦い始め

たんだよね。一九五十何年だったかな、もう戦い始めてから四十年以上だ」

「四十年！」

私は三十年戦い続けて独立を勝ち得たエリトリアのことを思い出した。あれ以上に長い戦いを続けている民族がいたのか、というのは驚きだった。

「ところがこのメラークキャンプ——他のキャンプもそうだけど、国連の難民指定は受けてないのよ」

「ええ？ どうして？ だって難民じゃないですか」

「厳密に言うと、違うんだってさ」

「何が、どう違うんです？」



「ミャンマーに追われて逃げてきたカレン族は、タイ側に受け入れるわけにもいかなくて、このキャンプで保護対象という扱いになっているわけだ」

「出られないんですか？」

「出られない。ここに監禁状態だね。タイもミャンマーも、カレン族が滅ぶのを待っているんだ」

「そこまでして根絶やしにしなくちゃならない理由っていうのは？  
何か利権が絡んでるんですか？」

「うん、まあ表向きは、ほら、カレン族って山間民族じゃない——だから森の中のローズウッドとか、そういう高級木材の利権がからんでるとか言ってるけど……どうかな」

R氏はそこで言葉を切って、苦笑いを浮かべながら話を続けた。

「ゴールドデン・トライアングル——黄金の三角地帯、って知ってるかい？」

「あ、あの麻薬の……」

「そうそう、それがちょうどカレン族の暮らしてるあたりなんだよね。これ、絶対関係ある、とおれは読んでるんだけどね。とにかくまあそういう密輸品の利権が欲しいんだよ、タイもミャンマーも」

「ようするにタイもミャンマーも知られたくないんだ、カレン族のことは」

「そういうこと。だから今回のロケも許可取るの結構大変だね。結局、お目付け役を一人同行させるっていう条件で、OKもらったんだ」

「じゃあ、キャンプ内は一々そいつの顔色をうかがいながら撮るわけですか？」

「いや、どうか。来てみないと、分からないな……話の分かる奴か、分からない奴か。でもまあ、二万バーツくらい包めば、お目こぼししてくれると思うよ」

「それ、最初に渡した方がいいですかね？」

「いや、タイミングっていうのがあるから。おれ、預かっとくわ」

そうやって談笑しているところへ現れたのが、タイ政府から派遣されたお目付け役だった。が、それは意外なことに、中年の太ったおばさんだった。政府職員の制服を着ているのだが、シャツの前ボタンが悲鳴を上げている。おばさんは陽気で、よく喋った。R氏の話では、メラーキ

ヤンプに視察に行くのは彼女にとつてもこれが初めてらしい。傍目にも興奮していて、物見遊山の気分が強いようだ。これは与し易そうだと誰もが思った。

「じゃあ、行こうか」

R氏がそう言つて、私たちは出発した。

午前九時のことだ。

空は深い曇天で、時々大粒の雨が通り過ぎる、荒れた模様だった。

どろんこ道を三十分ほど走ったところで、ひらけた田園風景の中に出た。雨の中、畑を耕している者がある。その者は大きな象に鋤を引かせている。冗談ではなく、本物の象である。サーカスみたいな農業ではないか。聞けば、カレン族は象使いが得意で、野生の象をしつけてはタイ

の農家に売ったりしているのだという。

「じゃあ、メラーキャンプっていうのは、野生の象がいる所なんですね？」

「いるいる。ワニもいる」

「まじですか」

「まじでいるから。あと気をつけなきゃいけないのは、寄生虫。象皮病とか」

「象皮病！」

「知ってるの？　すごいよね。象使いたちの村で、象皮病が流行ったりするんだから」

私はつい数ヶ月前、目黒にある「寄生虫館」を取材で訪れたばかりだ

った。寄生虫にやられた患部はいずれもむごいものなのだが、中でも一際「これはひどい……」と言葉を失ったのは、象皮病だった。あの病気を怖いと思わない人は、まずいないだろう。

私たちの車は、型こそ古いがトヨタのランド・クルーザー八人乗りだった。この車なら、相当な悪路でも行ける。その能力の高さを知っているのは、数年前、オーストラリアのパース郊外で、「サファリ・トレック」という一日のワイルド・ドライブを嫌というほど味わった経験があったからだ。

やがて車は密林の中を通って、山道に入った。けっこうな急勾配で、どろどろの悪路が続く。雨は激しくなっていた。霧が立ち込めてきて、遠くの風景を消している。

二十分ほど登ったところで、立ち往生している二台の怪しげなトラックを追い越した。二台のトラックは、顔をつき合わせるような格好で停まっていた。大雨の中である。二人の男がずぶ濡れになって立ち話をしている。一台めのトラックの荷は何だったろう？ スイカ、かぼちゃ？何かそういった球形のものを山積みにして、上から幌をかけてある。もう一台の荷はコンテナで、中は見えない。霧が晴れるのを待っているのか？ あんなに足場の悪い山道の道端で？

「今の……」

と言おうとした矢先にブレーキがかかった。急に霧が晴れて、見通しがよくなったのだ。その視界の中に、傍らの土手が崩れて半分埋まってしまった道が映っていた。

車は徐行して、土砂の際をそろそろと抜けた。運転しているR氏は言った。

「今の、霧が晴れてなけりや、突っ込んでたな」

アクセルをふかして、少し進むとまた霧だ。どうやら雨が止むと霧がわいてきて、しばらく雨が降ると霧は止むようになっていゝらしい。

やがて霧の間に間に即席で造った木製のゲートが見えてきた。道端に掘建て小屋が建っていて、中からタイ軍の兵士が現れた。手には自動小銃を携えている。助手席の窓を開けて、政府関係者のおばさんとずぶ濡れの兵士が短い会話を交わす。既に話は通っているらしく、兵士はすぐにゲートを開けてくれた。アクセルを踏みながら、R氏は言う。

「幽霊かと思つたぜ……」



確かに、霧の中から現れて霧の中に消えていった兵士の姿は、この世のものとは思えないほどおぼろだった。

ゲートから四、五分走ったあたりで、左手の密林の中にぽつり、ぽつりと粗末な小屋が見え始める。それは、ヤシの葉で葺いた屋根と木材で造られた家で、子供の頃『十五少年漂流記』の挿絵で見たようなものだった。

「さて、着いたぞ」

R氏は呟いて、車を左に寄せた。

下へ下りていく支道を塞ぐようなかたちで、今度は本格的な通行止め  
のゲートが築かれている。自動小銃を手にした二人のタイ軍兵士が脇を  
固めている。

風が吹いて、霧が晴れた。

兵士が二人とも近づいてくるのを見て、カメラマンは慌ててカメラを座席に置き、上からバスタオルをかぶせて隠した。一応、撮影禁止区域なのだ。

しかしありがたいことに政府関係者のおばさんが、相手の兵士が若いのを見て、お役所風を吹かせてくれたおかげで、すんなりと通れた。兵士たちはいずれも屈強で、迷彩の軍服を着ていた。

政府関係者のおばさんはここぞとばかりに自慢し始めた。タイ語だから何を言っているのかは、分からない——だけど大筋のところは分かる。「どうです！ 私にまかせておけば大丈夫なんだから！ 私、偉いのよ！ 誰にも何にも文句なんか言わせないんだから！ 舐めんじゃない

わよ！」

彼女がご機嫌なのを見て、ディレクターのK君が、

「カメラ、オーケー？」

と尋ねると、彼女は、

「オーケー、オーケー、オーケー」

とオーケーを連発してくれた。

「オーケー？ サンキュー」

苦笑いで礼を言いながら、カメラマンがカメラを構える。これでひとつ不安材料が失くなったわけで、つかの間、車内の空気が和んだ。

車はかなり急な下り坂を下っていく。道と言っても泥道で、まともな道ではない。

その道がようやく平らになった辺りで、私たちの車は黄色い傘を追い越した。傘の陰に隠れていた少女の姿を見て、私はあつと声を上げそうになった。オカツパ頭の女の子には、ひどい障害があった。健康なのは左腕だけで、右腕は肩までしかないし、右脚も太腿までしかない。左脚は膝まであって、そこにいきなり足首と足がくつついている。だから彼女は傘の柄を首と肩の間にはさんで、左腕と左脚を使っていざって歩く。一瞬だったが、私の目ははつきりと見た。

同じ民族を一箇所に集めて滅ぶのを待つ、ということはこの少女のような悲劇を生むことでもある。それとも戦闘の際に枯葉剤とか、化学兵器が使われたのだろうか？ それもありうることだ。

ようやく車の走りが安定してきたかと思うと、目の前に大きめのバラ

ツクが見えてきた。左手は密林の陰に隠れているが、住居や人の気配がある。

私たち一行は、ここメラーキャンプの野戦病院に「国境なき医師団」から派遣された看護師Y子さんを訪ねてきたのだった。何故、今、ここで働いているのか——その真意を聞いてみたかった。R氏と政府関係者のおばさんは残るといっているので、私とディレクターのK君、カメラマンRさん、音響のAJさんの四名が車を降りた。

「マラリアの蚊は六時になると飛ぶからよ、四時には絶対戻ってこいよ」

R氏はそう言って私たちを送り出した。

雨はほとんど止んでいた。時折、強い横風が吹き抜ける。ここは風の

谷にある村なのだ。と、訪ねようとしたバラックから、雨ガッパを着た女性が一人出て来た。Y子さんだった。

「まあ、まあようこそ。こんな時に、まあ」

「こんにちは。何だか大変なところにお邪魔しちゃったみたいで……」  
私は手を差し伸べて、彼女の小さな手を握った。三十代前半の小柄な、ボーイッシュな感じの女性だった。

「四時まで時間があります。いつもと同じようにお仕事なさってください。後について回りますから。もちろんお仕事のお邪魔はしません」  
ディレクターのK君が横から事情を説明する。Y子さんは気楽に、いいですよ、と答えて歩き出した。左手の密林に隠れた方へと向かう。足元は泥か水たまりだ。

「集落を抜けた先に診療所があります。まずそこへ向かいますね」

「さつき聞いたんだけど、マリアの蚊は六時になると出てくるっていうのは、本当？」

「本当ですよ。一時間くらいですけど、その間は誰も外に出ません。蚊帳の中でじっとしてます」

「マリアは、けっこう頻繁に？」

「ええ。今も診療所に一人います。薬が足りなくて……どうしてやりようもないんです」

密林の中を通る道の両脇に一軒、また一軒と民家が見えてくる。いずれもヤシの葉で屋根を葺いて、たよらない木材で建てた粗末な小屋である。そしてどの小屋も五十センチから一メートルほどのゲタを履いてい

る。つまり高床式住居だ。水がくるからだろう。通りすがりに覗きこむと、中には四、五人の住人がいた。薄暗い中に浅黒い肌が溶け込んで、白目だけがギラギラと光っていた。見ると、床に散乱している日用雑貨品のすべてに紐が巻いてあり、天井からぶら下げてある。鍋、プラスチックのカップ、歯ブラシ、箒、洗面器……ありとあらゆるものに紐がつけられ、床に放ってあったり宙空にぶら下がっていたりする。おそらく水で流されないようにとの実用的な用心なのだろうが、実にシユールな眺めだった。いつだったか観た寺山修司の映画『さらば箱舟』の中で、物の名前を忘れていってしまう主人公の山崎努が柱には〈柱〉、女房には〈女房〉、自分には〈俺〉と名札を貼っていた場面を思い出した。

私たちの訪問を知って、物見高い子供たちが集まってきた。彼らは空



気の抜けたボールを投げたり蹴ったりしながら、私たちにくつついてきた。中にはさっきの少女と似たような障害の子が一人、両脚のない子が一人混ざっていた。

「昨日の夜は、大丈夫だったんですか？」

「大丈夫っていうか……家は軒か流されましたけど。今は小康状態で、今夜が怖いですね」

私は曇天を仰いだ。

と、その時、真正面から小さな獣のようなものが猛スピードで走って来て、鋭角的に方向を変えながら私のそばを駆け抜けていった。私は、「ひっ」と息を吞んで身を硬くしただけだった。何だ？ 今のは？

十メートルほど先で立ち止まり、こちらを向いている姿をあらためて

確かめる——それはニワトリだった。軍鶏みたいに独特の体型をしている。ニワトリと言うより、テイラノサウルスみたいな恐竜に近い。羽はほとんどないが、その太腿の発達具合は異常だった。だから猛スピードで走れるのだ。そんな奴が、村の中を勝手気ままに走り回っているのだ。正面から向かってくると、襲いかかってくるようにしか見えない。だから一々身構えて、やり過ぎさなければならなかった。

「こちらです」

前を歩いていたY子さんがそう言って、突き当りに建つ大きめのテントの下に入っていた。何とか雨はしのげるといった程度の造りだ。熟れたバナナの匂いと、消毒用アルコールの匂いがする。

案内された病室は、病室とは名ばかりの、ただの板の間だった。そこ

に四人の患者が横たわっている。ダウン症の子供、マラリアにやられた子供、髄膜炎の赤ん坊、尿毒症の女。四人とも、まばたきの少ない、ぎらぎらと光る必死の目をしている。Y子さんはカレン族の若い娘を連れて、一人一人診察して回る。その際、できるだけ娘にやらせるのが、Y子さんのやり方である。

聞けば、彼女の真の目的は、カレン族の病気の治療にあるのではなく、教育にこそ主眼があるのだという。つまり地元のカレン族の中から優秀な娘を選んで、医療・看護の知識と技術を教育するのが、彼女の目的なのだ。言われてみれば、それはそうである。いくら彼女が覚悟を決めてメラーキャンプに来たからといっても、二年も三年もここに留まれというのはあまりにも酷である。だから彼女は懸命に後継者を育てようとし

ているのだ。

「ちよつと煙草を……」

そう断つて、私は一旦病室を出た——出たと言っても、布やベニヤ板で仕切られているところから外へ出ただけだが。そこは病院で言えば廊下みたいな場所だった。私は雨具のポケットからジップロックに入れておいた喫煙具一式を取り出した。ありがたいことにバンコクで買ったマルボロは、濡れていなかった。ライターも一発で点火して、私は何か勝ち誇るような気持でその一本を吸った。うまい煙草だった。

しかしその直後、私は見なければよかったものを見てしまった。

施設内を一応見ておくか、と思つて、私はテント地に覆われた下にある病室やオフィスを覗いて回つた。その、最初にふと覗いてしまった病

室がいけなかった。そこには、痩せたカレン族の青年が一人、診察台の上に仰向けになっている。コカの葉だろうか、彼はくちやくちやく何かを噛んでいる。上半身は裸で、右胸の乳首のあたりを包帯で覆っている。それをほどいていくと、彼の右乳首のすぐ脇には、三センチほどの傷口が見える。その傷口には、ピストルの弾みたいな脱脂綿の塊をねじ込み、傷口がふさがらないような処置が施されている。というのも彼の胸から脇の下にかけては巨大な出来物ができてしまい、中の膿が出切るまでには、何週間もかかるのだ。その手当というのは、まったく野蛮きわまりない。実を言うと、私はまだ二十代の頃、脇の下の汗腺が詰まって炎症を起こし、胸のあたりまで腫れ上がったのだ。おそろおそろ皮膚科に行くと、こりゃあひどいということになって、即、切開手術（麻酔ナシ）。

看護師三人がかりで傷口のそばをぐいぐい押し膿を出す。こっちはもう七転八倒である。膿を出し終えると、膿疱の中に包帯だか脱脂綿を突っ込み、ピストルの弾みみたいな脱脂綿の栓をねじり込まれるのだ。

今、目の前に横たわっている青年は、それとまったく同じ病気で、同じ治療を受けていた。

見習い看護師らしき女性は、ピンセットを手に寝台に近づくと、まず傷口に栓をしてある脱脂綿の塊をぎゅうーとひねりながら抜いた。たちまち血膿がどっと溢れてくる。見習い看護師は、その血膿をできるだけ出してしまおうと、躍りになって青年の胸の膿疱を押ししたり、つねったりしている。それからまたピンセットを手に、傷口の中に差し入れて、血膿を吸った包帯を探り出した。この包帯が驚くほど長い。一メートル

以上あったのではないか——それをようやく引きずり出すと、今度は新しい包帯を傷口から中に突っ込み、脱脂綿の弾で栓をされるのだ。そして、「三日後にまた来い」と言われるのだ。

私は自分の思い出を蘇らせて、脂汗を流したが、それをやられている青年は驚いたことに、苦痛の声ひとつ上げなければ、眉ひとつ動かさない——その忍耐強さは、異常だと思う。

私はその一部始終を時折目を背けながら眺めていた。そしてふと目をやると、そこには手作りのポスターが貼ってあった。字の読めない人のために、絵と写真で訴えている。絵は単純だ。手を洗わない男にバツがしてある。それからその男が洗わない手でものを食べる。そして最後には、象皮病に冒された無残な脚の写真が貼ってある。つまり、象皮病に

気をつけましょう、と呼びかける啓発ポスターだったのだ。

「車に戻って、昼飯にしましょうか」

ディレクターのK君は病室から出てくるなり、そう言ったが、私は何も答えずにいた。

小高い場所に破壊された教会と、朽ちかけた東屋があった。雨も小降りだったので、私とY子さんは、その東屋まで登っていった。いい眺めだった。村の全貌が見渡せる。風が吹いて、霧が流れた。

すると目の前に、ほぼ垂直に切り立った断崖が姿を現した。高いところで四十メートル以上あるだろうか。そういう岩肌の壁が、見晴るかす限りずうっと向こうまで続いている。この断崖絶壁の向こうが、ミャン



マーなのだという。まるで神がナイフで傷をつけて造ったような国境だ。メラーキャンプは、崖に沿って南北に長く設けられている。

「ここにいとると、日本では本当に何でもないことが、実はありがたいことだったんだなあつて、よく思います」

「それは、例えば？」

「……蛇口ひねると水が出る。スイッチ入れれば電気がつくとか、そういう何でもないことに感謝なんですよ、本当は」

「そうだねえ」

「例えば私の助手をやっているカレン族の娘がね、彼女はとても優秀なんですけど、ある時、こう言ったんです。『いいなあ、Y子はパスポートがあつて』て。何が？ って訊き返したら、ようするに彼女はパス

ポートがないんです。どこの国の人間でもないんです。だからどこへも行けないんです。私結構ガンときちゃって。そうか……パスポートがあるっていうことは、幸福なことなんだって」

私はもし日本が世界から認められずに、パスポートも発行してくれなかったら……と想像してみた。その上、日本人全員が例えば四国に閉じ込められて、そこから出られないとしたら？ それは想像するだに不条理で、承服できない状況だろう——だから彼らカレン族は未だに闘っているのだ。それは戦闘開始から四十年以上が経った今でも、承服できないものは承服できないのだ。

「……これを渡るのかよ」

私は水辺に呆然と立ちつくした。集落の北側、少し低い場所に来てみたら、そこはもう川になっていた。流れも激しくて、丸裸の子供たちが水遊びをしている。彼らの様子を見るかぎりでは、深くても腰までだろうと思われた。

「ワニはいないだろうな……」

言ってみたが、誰も答えてくれなかった。私たちはそれぞれ自分の荷物を頭の上に載せて、ゆっくりと川に入った。初めはくるぶし、次はふくらはぎ、と一足ごとに深くなっていった。へその上まで水がきた。水底はぬるぬるの泥濘である。幅は、十メートルもあつたらうか。浅瀬を踏んで、気がゆるんだのか、渡り切る直前で私は転んだ。そして膝頭を水中のコンクリート片に打ち付けてしまった。痛かった。しかしそれ以

上に私は傷口から細菌が侵入するのではないかということが、怖かった。

「何のために？」

私は思った。

「何のために今自分はこんなところにいるのだろうか？」

Y子さんと助手を先頭に、一行は北側の高台に建つ仮設住宅を訪ねるのだ。そこには先週、ミャンマー側から逃げてきたカレン族の家族が避難しているという。何でも彼らが与えられた住居は昨夜の洪水で流されてしまったので、臨時の小屋に移ったばかりらしい。

密林の中の道を行くと、右手に教会らしきバラック小屋が建っていて、中から子供たちの声がした。彼らは下手くそだけど、聖歌を歌っていた。目的の家はこの教会の向かいにあった。訪ねていってみると、生活感の

まったくないがらーんとした部屋に、白目のくつきりと際立つ四人のカレン族の家族が、座ったままで私たちを出迎えた。諦めたような、悲しみをたたえた瞳である。

一家は夫婦ともに三十代。七歳になる双子の男の子がいる。ところがそのうちの一人に異変が現れたのは、半年ほど前だったという。喉の左側が腫れてきたのだ。それはどうやっても治らず、今は拳くらいの大きさでぱんぱんに腫れ上がっている。これはどうしたのか、とY子さんに尋ねると、意外な答えが返ってきた。

「結核です」

「結核？　結核でこんなふうになるの？」

Y子さんは無言でうなずきながら、男の子の腫れ物の様子を診ている。

「どうするの？ 治してやれるの？」

「今、薬がないから、どうしようもありませんね」

「どうしようもないんだ……」

私は男の子の喉に出来た腫れ物と、冷たく悲しい彼の瞳を交互に眺めた。

道の向こうの教会から子供たちの一際高い歌声が、蟬時雨のように響いてきた。